

特集

COVID-19感染拡大における純真学園大学看護学科の 教育への取り組みと課題

濱田 維子・生田まちよ・分島るり子・武藤 元美
新地 裕子・後藤みゆき・山崎 律子

純真学園大学 保健医療学部 看護学科

Initiatives and Issues in Education at the Department of Nursing,
Junshin Gakuen University during the Spread of COVID-19

Masako HAMADA, Machiyo IKUTA, Ruriko WAKESHIMA, Harumi MUTO,
Yuko SHINCHI, Miyuki GOTO, Ritsuko YAMASAKI

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University

【要旨】 本学看護学科における COVID-19感染拡大下における組織的取り組みと、成人看護学（急性期）、精神看護学、母性看護学、老年看護学、在宅看護学における臨地実習の取り組みと課題について報告を行った。高機能シミュレーターや効果的な視聴覚教材の活用など対象者の全体像把握やケアの方法など専門領域の特徴を加味して、リアリティを迫り学生にイメージしやすいような工夫がされていた。また、学生が患者役と看護師役でロールプレイングをしたり、振り返りの時間を多くとることで事例についての学びを深める工夫がされていた。臨床現場での看護学実習が制限される状況においても、今回明確になった学内実習におけるメリットや課題を生かしながら看護教育の質を担保し向上していくことが必要である。

キーワード：看護学教育、臨地実習、COVID-19感染拡大、代替実習

I. はじめに

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）拡大下における日常生活を営む上での基本的生活様式のもと移動制限や行動制限が実施され、看護学教育においても、対面での講義や実習受け入れ病院や施設の状態もあり臨地実習が難しい状況が続いた。

この状況下で、厚生労働省および文部科学省より看護師養成学校に対して、新型コロナウイルス感染症の発生に伴う対応についての通達¹⁾がなされた。学生等が新型コロナウイルス感染症に罹患した場合等であっても実習時期の変更や学内実習に代える等、教育を受ける機会を最大限確保すること、学生の修学等に不利益が生じることのないように実習施設の確保が困難な場合には臨地実習に代えて演習または学内実習等を実施してよいこと、ただし必要な単位もしくは時間数の履修は必要であり教育内容の縮減を認めるものではないことなどが通達された。そして、新型コロナウイルス感染症の対応により実習中止・休講等が生じた場合、代わり得る学修の実施により必要な単位等を履修して卒業（修了）した者は、従来どおり、各医療関係職種等の国家試験の受験資格が認められることが示された。

看護職者を養成する大学においては、対面での講義や臨地実習が難しい状況の中で、教育の質を維持していくことは重要な課題であった。多くの看護系大学において、ICT（Information and Communication Technology）を利用した遠隔講義はもとより、臨地実習の代替実習など多くの工夫のもとに教育が実施された。本学の看護学科においても、多くの工夫の元に教育が行われていた。

今回、本学看護学科における組織的取り組みと今後の課題、および、COVID-19感染拡大による実習への影響や問題点、具体的取り組み内容、評価、今後の課題について報告する。なお、報告領域は、領

域別実習の中で執筆時点で、当時の担当教育者が所属している成人看護学、精神看護学、母性看護学、老年看護学、在宅看護学の領域とする。

Ⅱ. 看護学科における組織的取り組みと今後の課題

1. COVID-19感染拡大に伴う教育手段の模索

COVID-19は、私たちの生活はもちろんのこと、社会・経済・教育活動のすべてに大きな影響を及ぼした。特に、医療現場は、看護職をはじめとした医療職の使命感によって支えられていると言っても過言ではない。そのような中、看護教育の責務は、看護職が必要とされている臨床の現状とやりがい、そして厳しさをリアルタイムに学生に伝え、キャリアへの士気を高めることだと感じている。私たちは、看護教育に必要な不可欠な学修機会の担保と安全確保（感染対策）という狭間で葛藤しながら対応してきたように思う。

感染対策に関しては、2020年5月より、急遽、学科内で感染対策委員会を立ち上げ、COVID-19の予防に関する情報収集と学生・教員間への周知、基本的な感染対策の実施と必要物品の準備、環境整備を依頼した。本委員は、学科教職員間での共通認識にとどまらず、学生の感染対策委員を選出し、学生間での感染予防啓発活動や清掃活動を促す教育的取り組みも担った。一方、教育においては、遠隔授業が感染予防を兼ねた唯一の代替措置であったが、大学の通信システムや学生の自宅での通信環境が整わない上、教員の活用スキルも一様でなかったため、不安や戸惑いは大きかった。中止が相次ぐ実習と演習については、実習の弾力的な運用を許可するとともに、視聴覚教材やICT教材を活用したオンデマンド等を推奨することが文部科学省から通知された²⁾。しかし、教員は、「自宅や学内で、実習に代わるどんな学習が可能なのか?」「その手段や準備は?」と暗中模索の状態に対応に迫られた。今振り返ると、実習施設との遠隔でのコミュニケーション等、学生がよりリアルな臨床現場を感じる教育手段を積極的に協議すべきだったとも思うが、当初、第一線で未曾有の感染症患者を救うために奮闘する臨床現場に、看護学実習への協力まで依頼することはためらわれた。まずは、学科全体で、遠隔授業における教員のスキルアップを支援する体制が必要だった。

そこで、大学ICT専門部会員として活躍する教員が中心となって、遠隔授業ツールを作成し、教員への周知や個別サポート、ICT活用事例の共有、活用状況の把握や研修会企画・運営を行った。その甲斐あって、日を追って教員のスキルも上達し、遠隔授業でのグループディスカッションや発表会の運営も可能となった。現在では、当時導入したe-learningシステムの活用や双方向の授業展開など、学生の主体的学修を促す教育方法に大いに役立っている。いずれも、COVID-19による危機は、通常業務に加え先導してくれた教員と、限られた環境でより高い学修効果を目指そうとする教員の意識があったからこそ乗り越え、チャンスに変えることができたのだと感じている。

2. COVID-19に伴う看護学実習への影響

看護学実習は、臨床の対象者や指導者との関わりを通した貴重な体験学習であり、学内でのシミュレーション教育の充実によっても代えられない教育効果がある。看護学教育の在り方に関する検討会³⁾においても、看護の臨地実習は、“看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うこと”だと位置づけ、“看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程である。”と意義づけされている。その実習が中止となり学内での演習に変更されること、臨地においても対象となる患者との関わりが大幅に制限されることは、学生にとって不可欠な学習過程が欠落することにもなりかねない。

日本看護系大学協議会が令和3年4月～5月に実施した新型コロナウイルス感染症影響下における看護系大学の臨地実習実施状況に関する調査によると⁴⁾、令和2年後期の時点で、臨地実習が通常通りできた大学は7.2%で、87.6%の大学は、一部のみしか臨地実習ができなかったと回答している。本学にお

いても、臨地実習の中止に伴う代替措置として学内演習となった学生は、令和2年に比べて令和3年でその割合は減少したものの、2~3割は学内実習で代替措置を取らざるを得ない状況であり、特に、老年看護学実習、小児看護学実習では約6割の学生が学内実習となった(図1)。この状況は、同じ学年の学生において修学内容の差を生み、学修機会の平等性が担保できないという課題も生んだ。

さらに、COVID-19感染拡大前の2019年(令和元年)の4年次生と、2021年(令和3年)の4年次生とで、卒業時看護技術到達度を比較すると、その差は明らかとなった(図2)。本調査は、毎年4年次生を対象として、160~170項目における看護技術の到達度を4段階の評価基準にて自己評価させているものである。その内、「患者の歩行・移動介助」、「患者に合わせた食事介助」を単独で実施できる学生が、それぞれ85%から49%へ、73%から25%へ低下して

いるように、患者を対象とした看護技術を修得できず、見学や知識だけにとどまったまま卒業する学生が大幅に増えた。シミュレーションやロールプレイ、模擬患者等を活用した実習代替教育を工夫してきたが、臨床現場での卒後教育への影響は否めない。今後は、今まで以上に、大学と臨地実習施設双方が情報共有しながら、共に人材を育成する継続的な教育体制の構築が求められる。

3. 学生対応に関する課題

本学では、コロナ禍でも対面授業を重視し、比較的、遠隔授業期間が短かったため、学生の心理的負担が表面化することはほとんどなかった。SG(Small Group)制度により、担当教員と学生が直接連絡を取りやすい体制があったことも心理的支援につながったと感じている。しかし、学生は、医療系大学の学生として、日常生活においても厳しい感染予防行動が求められる。行動に問題のあった学生に対しては、厳しい指導や助言を繰り返してきた一方で、20歳前後の学生が抱える負担感も理解でき、指導する教員側にも葛藤があった。学生にとって評価者である教員の立場では支援が困難なケースもあり、健康管理センター職員やカウンセラーは重要な支援の役割を担っていた。また、保護者の収入減やアルバイト先の激減により、経済的問題を抱える学生も増えていたため、事務局就職係でしか収集できなかった奨学金関連の情報を、講義室前に集約して掲示するなど必要な学生に情報提供しやすい環境設定に努めた。今後も大学として可能な支援を検討していくことが必要だと考える。

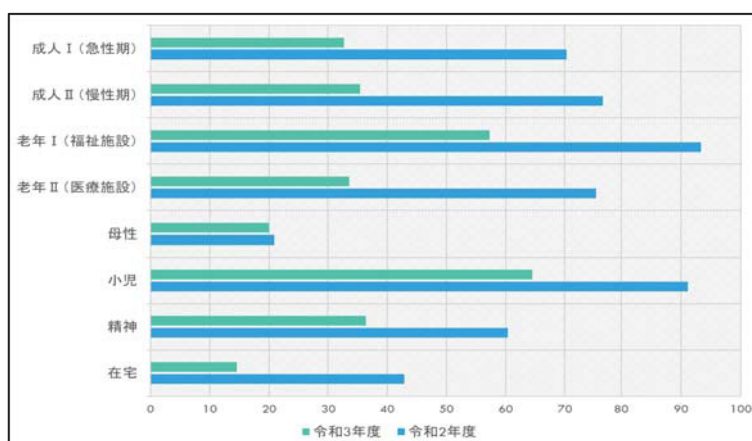


図1 臨地実習の代替措置として学内実習・学内演習となった学生の割合(領域別)

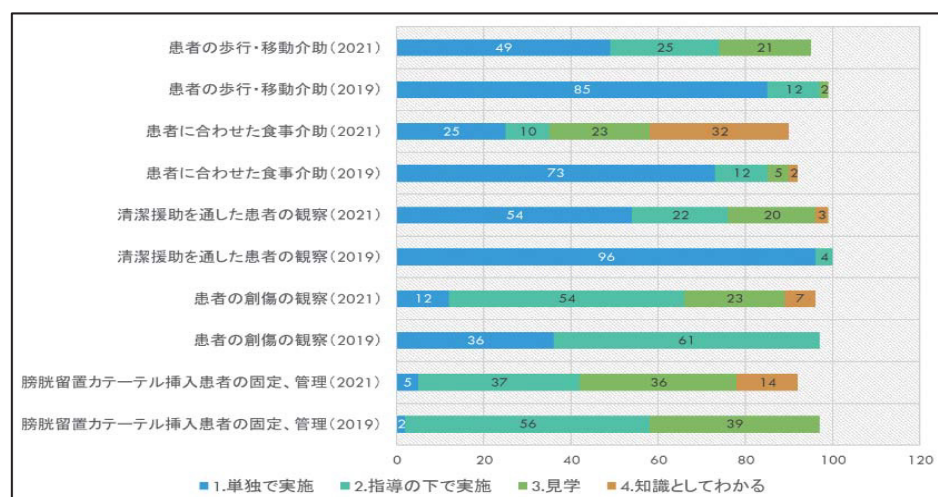


図2 本学における卒業時看護技術到達度

4. 看護教員の働き方に対する示唆

令和3年6月より、全国で新型コロナウイルス予防接種の職域接種が開始されたと同時に、本学の看護教員は福岡市のワクチン接種会場への応援要請に応えることになった。業務に支障のない夜間もしくは土日の応援体制を組み、7月3日～8月29日の約2カ月間、看護学科教員計27名を派遣した。災害ともいえる未曾有のウイルス感染拡大時に、看護教員として地域貢献できたことは非常に有意義だったが、一方で、若い子どもの世話や高齢の親の介護を担う者が、家族の健康と同時に、自らが感染の媒介となるリスクに向き合い、通常業務に加えて地域貢献を担うことは、心身ともに大きな負担であったと思う。日頃より、災害発生時の大学と個々の役割を意識し準備しておくこと、近隣の看護系大学と情報交換し協力できる関係を築く重要性をあらためて再認識することができた。

Ⅲ. 各看護学領域の取り組み

1. 成人看護学（急性期看護）

1) COVID-19感染拡大による実習への影響や問題点

令和2年度より COVID-19により本来行ってきた形での臨地実習ができなくなり、本学における領域別実習も一部を学内実習に変更せざるを得なかった。成人看護学実習Ⅰでは主に周術期の対象への看護を学習する科目であるが、学内実習に変更したことによって学修目標への到達が困難になったのは看護の実践部分であった。臨地での実習においても、直接患者への援助を実践できない環境であったため、看護の実践に関しては主に学内実習での経験が主体となった。

そこで、より臨床での看護実践に近い形での看護の実践を経験させるために、高機能シミュレーターを用いた手術直後の患者の観察、および手術後の離床援助の演習を行った。

2) 実習への具体的取り組み内容

成人看護学実習Ⅰは3単位135時間で実施しており、学内実習への実習方法の変更にあたり表1のように実習に内容を修正した。（表1参照）

表1 3週間の実習計画の変更

週	日	コロナ以前（～2019）		コロナ禍（2021・2022）			
		実習場所	実習内容	実習場所	実習内容	A	B
1週目	1	AM 学内	学内・病棟オリエンテーション	学内	学内オリエンテーション/ICU 看護	学内実習	臨地実習
	2	臨地	情報収集・アセスメント	学内	手術直後の観察 演習（GW：観察項目の抽出・計画の立案）		
	3	臨地		学内	手術直後の観察 演習（観察・報告の実施）		
	4	臨地		学内			
	5	臨地		学内			
2週目	1	臨地	情報収集・アセスメント	臨地	病棟オリエンテーション/OP 室見学	臨地実習	学内実習
	2	臨地		臨地	情報収集・アセスメント・計画立案 看護実践の見学		
	3	学内	アセスメント・計画立案	臨地			
	4	臨地	受持ち患者看護	臨地			
	5	臨地		臨地			
3週目	1	臨地	受持ち患者看護	学内	手術後 1 日目の援助 演習	学内実習	
	2	臨地		学内	実習記録まとめ		
	3	臨地		学内	実習記録まとめ（個別面接）		
	4	学内	実習の振り返り・グループワーク	学内	実習の振り返り・グループワーク		
	5	学内	実習のまとめ・発表会	学内	実習のまとめ・発表会		

(1) 手術直後の観察演習

手術直後の観察の演習は実習のローテーションの都合上、実習1週目または2週目に実施した。学内実

習にあたって考慮したことは、①高機能シミュレーターで臨地での看護実践に近い形で手術直後の患者の状態を再現すること、②十分に時間をかけてグループワークを行い、観察する項目、根拠、具体的方法を検討すること、③実施場面の動画を撮影し、実施状況の振り返りを行いながら行動を修正すること、の3点だった。

手術直後の観察演習は4日間で実施した。まず、学内で講義の際に使用した大腸癌（2020年）と胃癌（2021年）の事例を活用して、2日間かけてグループワークを行い、観察項目の抽出、観察の具体的方法、優先順位を検討した。グループワークを行う際には、ホワイトボードに観察の内容・手順を記載し、メンバー全員が同じ視点で考え、実施の際にも項目を確認しながら実践できるようにした。更に、最後に観察した内容について報告を行わせ、観察した内容と報告する内容の違いや相手に状態が伝わるように報告する方法について検討した。

また、全員の実践場면을 iPad で撮影し、動画を見ながら実践状況をふり返り、計画・行動を修正しながら繰り返し実践した。

(2) 術後の離床の援助演習

術後の離床の援助は、臨地での実習を終えた後に実施し、学生が患者役となり術後1日目の状態を再現し、直前の観察と離床の援助を実施するところまでを実施した。

離床の援助は、術後1日目の初回歩行の場면을想定し、手術直後の観察時と同じ事例を使ってグループワークを行って、概ねの観察・援助の内容についてグループで検討し計画を立案した。計画立案に際しては、離床可能な状態かを確認するための観察や手術直後との観察内容の違いや患者への必要性の説明などについて具体的に挙げることを指導した。

臨地実習で患者への看護実践ができない状況であったため、具体的患者実践についてグループで立案した計画に沿って個々に実施した場면을記載し、評価した。

3) 評価

(1) 演習を通しての学修内容の理解

術後の観察演習、および離床の援助の演習を通して、主たる学修内容である「急性期の看護実践」について質問した。術後の観察演習は表2に示すように、「そう思う」実と答えた学生が2020年は81名（85.3%）、2021年は93名（88.6%）であり、離床の援助演習は表3に示すように、「そう思う」と答えた学生が2020年は79名（83.2%）、2021年は90名（85.7%）であった。2020年2021年とも「どちらかといえばそう思う」を合わせると99% 近くの学生が演習によって急性期看護の理解ができたと答えた。

表2 術後の観察の演習をととして、急性期の看護実践について理解することができたか

	n	そう思う		どちらかといえば そう思う		どちらとも 言えない		あまり そう思わない		そう思わない	
2020年	95	81	85.3%	13	13.6%	0	0%	1	1.1%	0	0%
2021年	105	93	88.6%	12	11.4%	0	0%	0	0%	0	0%

表3 離床援助の演習をととして、急性期の看護実践について理解することができたか

	n	そう思う		どちらかといえば そう思う		どちらとも 言えない		あまり そう思わない		そう思わない	
2020年	95	79	83.2%	15	15.8%	1	1.1%	0	0%	0	0%
2021年	105	90	85.7%	15	14.3%	0	0%	0	0%	0	0%

(2) 実習に対する満足度

学内実習での演習を含む実習に対する満足度は表4に示すように2020年、2021年とも80~90%の学生が「満足している」と答えた。

表4 今回の実習（学内演習も含む）を全体的にみたときに、どの程度満足しているか

	n	満足している		どちらかといえば満足している		どちらとも言えない		あまり満足していない		満足していない	
2020年	95	76	80.0%	17	17.9%	2	2.1%	0	0%	0	0%
2021年	105	96	91.4%	9	8.6%	0	0%	0	0%	0	0%

(3) 学びの内容

学生の学内実習での演習での学びについての自由記述の中から主なものを表5にまとめた。

4) 今後の課題

コロナ禍での2年間は、臨地実習の制限が大きく本来の形での臨地実習を行う事ができなかったため、学修目標の達成が難しい状況となった。そのような中でも、極力、臨床での看護実践に近い環境や条件設定で、学生が看護を実際に実施できるように工夫し、学生の反応を見ながら方法を修正しつつ学内での演習を行った。この2年間の学内実習の実践によって、教員自身も学内実習でしかできないこと、臨地実習でしか経験できないことをより明確に認識することができた。すなわち、学内実習でのメリットとは、第1にシミュレーターや学生同士などの安心できる環境下で時間をかけて観察や離床の計画を検討することができるため、臨地実習では十分に確認することが難しかった援助の目的や根拠、目標を達成するための方法の工夫などを十分に検討することができる点である。第2に、実施場面を撮影した動画を視聴しながら自らの実践を振り返りながら、繰り返し体験することができる点である。また、第3にグループワークによって学生相互の知識を共有することができ、学びが深まる点である。

表5 学内実習での学び

- ・ アセスメントや計画で不足があった場合訂正を行うことが出来るので、深く学習ができた。アセスメントが深まることで、周術期の患者を理解し、演習も充実していた。
- ・ 術後の観察や離床の時の観察などをグループ間で話し合う時間があるからこそ必要な観察項目について学びを深めることができた。
- ・ 何度も繰り返し援助を行い、改善を行うことにより良い援助を考えることが出来た。
- ・ 今は特に患者さんに対して直接的な援助ができないため、実際に援助を行えたことは学内だからできたことだと思う。
- ・ マネキンに対して、自分たちで物品を扱い取り付けを行ったことによって、どこにどのようにして挿入されているのか考えるきっかけができた。
- ・ 自分たちで一つのマネキンに対してそれぞれが実践することで、意見交換ができ、それぞれに改善点がみつき、自分の観察の行動を見直すことができた。
- ・ 学内実習だからこそ知識を深めながら実践ができた。分からないことや困ったことはその都度グループワークを通して話し合うことができたのでよかった。

一方で、臨地実習でしか経験できないことは、実際の患者とのコミュニケーションや援助の実践、実習施設での指導者との調整や報告・連絡・報告などの実践であり、学生にとっては見学のみで自らが実践しないことは、看護技術の習得だけでなく、それに付随する知識や態度の習得にも影響していることを実感させられた。

今後は、臨地実習の範囲が拡大していくと考えられ、学内実習のデメリットは解消されることが期待されるが、今回得られた学内実習におけるメリットも生かしながら、学生のより良い学修につながるように指導を工夫していきたい。

2. 精神看護学

1) COVID-19感染拡大による精神看護学実習への影響および問題点

学内実習への変更が生じ、対象者理解・援助的人間関係の構築・対象者の主体性を尊重した援助などの対象看護、精神科リハビリテーション・職種連携などの治療共同体への参画に関する学習が困難となった。これらを補完するための工夫点と学生の学びについて、令和3年度精神看護学学内実習履修者の実習終了時アンケートをもとに報告する。

2) 具体的取り組み内容

学内実習は、①精神科看護実習、薬物療法、社会生活技能訓練（Social Skills Training 以下 SST）、地域精神保健活動などに関する既存の視聴覚教材視聴と文献学習、②視聴覚教材事例による看護過程展開と看護計画発表、③模擬患者である教員とのロールプレイングによるコミュニケーション演習、④コミュニケーション演習場面に對しプロセスレコード（看護師と患者間の相互関係における文章記録のことで、看護の振り返りとして用いられている）の記載と検討会の実施、⑤プロセスレコード検討会後のロールプレイングによるコミュニケーション演習、⑤学生による患者役2~3名、スタッフ役2名での SST セッション展開で構成した。

(1) 学内実習への変更に対する工夫点

①対象者理解について

学生は、実際の患者と接することができないことで、症状出現時の患者をイメージできにくいことが予測された。そのため、視聴覚教材の事例を用い、映像で理解を助けるようにした。事例は、入院当初から退院まで経過をおって展開されていたため、学生毎に異なる受け持ち時期を設定し、急性期、回復期、リハビリ期、社会復帰期の患者の状態や時期に応じた看護の違いなどを理解できることを目指した。

②援助的人間関係の構築について

教員が模擬患者となり、ロールプレイングによるコミュニケーション演習を行った。学生の観察技術を養い対象理解を深めることを目的に、治療的コミュニケーション実践の機会とした。ロールプレイングは各学生に対して2回実施し、演習後にプロセスレコードでの振り返りと検討会を実施した。初回コミュニケーション検討会後に同場面を再度模擬患者で演習し、自身の関わり方によって対象者の反応が変化するという、コミュニケーションの相互作用を理解する機会とした。

③対象者の主体性を尊重した援助と治療共同体への参画について

看護介入による効果を評価することを目的に、精神科リハビリテーションの一つである SST セッションの計画、実践、評価を体験する機会を設定した。SST は精神障がい者が示す生活上の困難（特に対人関係技能）に焦点を当て、社会生活技能やストレス対処能力の改善を目的とした治療法で、スタッフ役には、参加者の目標や希望を引き出す力が求められる。セッションは、学生による患者役2~3名、スタッフ役2名で行った。学生全員がスタッフ役を体験することはできないが、スタッフ役と患者役の双方から気づきや学びの意見交換を行い、お互いの言動に対する影響について理解を深める機会とした。

④職種連携の実際やその他の知識の補完について

臨地実習では、実際の連携や援助場面の見学・病棟カンファレンスを通して、家族および医療チーム間の協力関係の必要性の理解・地域における精神保健福祉のサポートシステムの現状について学習する。学内実習では実際の場面を見学できないため、既存の視聴覚教材や文献学習により補完を目指した。また、教員の臨床経験を伝えるなどして、学生の疑問の解決に努めた。

3) 評価

①対象者理解について

看護過程に関する記録は、DVD からの情報収集をもとに、情報整理・アセスメントと計画立案を行い、これまでの臨地実習と同レベルの内容が記されていた。実習終了時アンケートには、「患者の具体的な症状と看護を DVD で見て、病院に行けなくてもリアルな患者の症状を知れた」とあり、視聴覚教材は学生の対象者理解を助けていた。また、看護師の患者対応場面を DVD で確認することは、臨地でのシャドウイング（ロールモデルの後ろを影のようについて同行する学習方法）実習の代替となる可能性がうかがえた。「受け持ち時期によって看護内容が違っており、患者のペース（段階）に合った計画立案の大切さを学んだ」との内容からは、患者の状態に応じた看護方法および重要性を理解できていたことが確認できた。

②援助的人間関係の構築について

ロールプレイング演習では、「患者の表情や視線から状態を読み取り、判断してコミュニケーションをとる経験ができた」などアンケートに記載されており、コミュニケーションの基本技術である傾聴技法を用いて模擬患者の反応を捉えた対応ができていた。さらには、DVD 事例患者を想定し不安軽減のための関わりを試みる学生もあり、自ら観察した内容をアセスメントし実践する場にもなっていた。また、同じ場面を2回ロールプレイングすることで、「1回目のロールプレイングでできなかったことを、プロセスレコードで客観的に見て改善点が明らかになり、自分で気づけなかった点をグループメンバーに指摘してもらえて2回目で改善できた」などの意見がでていた。実際の看護場面では、同じ場面を2度体験することはできない。しかし、演習では2回体験することができたことが、今回の学びにつながったと考える。

③対象者の主体性を尊重した援助と治療共同体への参画について

学生は、SST セッションの体験により、「参加者ひとり一人の力を引き出すために、その人の状態や特徴を理解して発言を促し、称賛することで患者の自信に繋がる」「患者が解決したいことに看護師が介入しすぎて解決策を誘導するのではなく、あくまでも患者主体で患者の意思を尊重することが大切である」「患者自身で問題解決することで、自ら挑戦してみようという気持ちになれると学んだ」「スタッフはメンバーが主体性をもって参加できるよう配慮することが大切だと学んだ」などの学びを得ていた。患者役の学生の表情や態度に応じて、対応を変える学生もあり、対象者の状態に合わせた援助の学びにつながっていた。

④職種連携の実際やその他の知識の補完について

DVD 視聴学習は、「精神に障害をもつ人の思いを知れて良かった」「家族との関係を学ぶ機会が少なかったため、家族が SST に参加している DVD を観られてよかった」「事例だけでは学べなかった社会資源や社会復帰について、DVD で学べてよかった」などの声があり、精神に障害をもつ人や家族の思いを知る機会になっていた。臨床について、「教員の臨床での話を聞き、施設に行けなくても、学内で様々なことを学べた」「教員から実際の病院での話を聞けてイメージができた。そのイメージをもとに看護計画に生かすことができた」などの意見があり、見学実習に近づけることができたと考える。しかし、職種連携について述べた学生はおらず、実習方法の修正が必要である。

4) 今後の課題

看護過程では、職種連携の学習に必要な情報を事例に追加するなどの課題が見えた。治療環境に関しては、「物品や設備など他病棟との違いを詳しく見たかった」「精神科病院の特徴である部屋の作りなどを詳しく見たかった」との要望があった。コミュニケーション演習では、「実際の患者ではどうなるのだろうか」と、患者と接していない不安もうかがえた。当事者参加型シミュレーション教育では、ロールプレイングでは得られないリアリティや、当事者の助言から学びを得たとの報告がある⁵⁾。また、コロナ禍の学内実習の取り組みとして、施設と大学をオンラインでつないだ入院患者やデイケア利用者とのコミュニケーションが、精神障がい者の健康的な部分や苦悩への理解につながったという報告もある⁶⁾。DVD 視聴や教員の臨床経験は、当事者の思いや臨床場面の一部を知る機会となっていたが、直接のコミュニケーションは、より対象理解が深まると考える。

今後は、精神保健福祉法に基づいた治療環境の理解や、患者や臨床指導者とのコミュニケーションを含めた実習施設との連携を検討していきたい。

3. 母性看護学

1) COVID-19 感染拡大による実習への影響および問題点

母性看護学実習は、表6に示す実習目的・目標のもと、2単位90時間の実習である。実習の構成は、1

週間が臨地の産科病棟で、残りの1週間が地域の妊婦夫婦を招いて育児教室を開催している。

ところが、2020年度から新型コロナウイルスが猛威を振るい、まずは、参集での育児教室は感染リスクの問題から、開催が難しいと判断した。だが、地域の妊婦が子育て関する相談の場を失っていること⁷⁾から、半ば試験的に遠隔での開催へと変更した。

病棟実習は、2021年度に20グループ中4グループ（20名）の学生が学内実習に変更となった。実習内容は、正常経過を辿るであろう褥婦とその新生児を受け持ち、対象を理解し、看護過程を展開する。しかし、学内実習へ変更となり、教員の学ばせたい意図を埋め込んだ状況や対象とのやり取りの中で、反応を引き出し、その反応をどう解釈するかなどの学習は、ロールプレイが最適であると判断した。そこで特徴的な2事例の模擬褥婦を、教員が演じて、臨床に近い状況で学内演習を行った。

今回、①対象理解と体験を工夫した遠隔の育児教室、②リアリティを追求した学内演習の2点について報告する。

表6 母性看護学実習の目的・目標

実習目的: 妊婦・産婦・褥婦および新生児とその家族、さらには子育て環境を理解し、対象に応じてより健康な生活を目指した看護能力を養う。

実習目標

1. 妊産褥婦と新生児およびその家族を、身体的・心理的・社会的側面からとらえ、理解できる。
2. 妊産褥婦と新生児およびその家族の状況を、健康の保持増進と発達を促すwellnessの視点でアセスメントし、看護過程を展開できる。
3. ライフサイクル各期における女性の健康課題を明確にし、支援の必要性を理解できる。
4. 母子保健分野における継続看護の意義が理解できる。
5. 母子に関わる関連諸機関との連携、社会資源とその活用方法について理解できる。
6. 生命の尊厳、母性性・父性性、母性看護の意義と役割について、個人の考えを表現できる。

2) 実習への具体的取り組み内容

(1) 対象理解と体験を工夫した遠隔の育児教室

参集型では、夫は妊婦ジャケットを装着しての妊婦体験、夫婦ともに新生児人形を用いておむつ交換、抱っこ・授乳、沐浴などの育児体験ができる。それを遠隔では、自宅にあるもので代用して育児技術の一部を体験するように変更した。

参集型では、実習の目標の1つである妊娠期の対象理解として、妊婦が来校してくれることで直接関わることができ、身体的変化や指導の反応、何気ない会話の中で、妊婦夫婦の妊娠や分娩、育児や生まれてくる子どもへの思いなどの心理的特徴に気づくことができる。その点が、遠隔では、限られた画面越しで、カメラ機能が上手く活用できないと、参加者の画像すらわからない。可能な限りカメラ機能をONにしてもらい、参加者の反応・実技の動きが学生に視聴できるようにした。また、妊娠中の気になっていることなど、自己紹介や交流会で伺うようにした。さらに、指導案の中に、体験してどうだったか、理解状況などを引き出す声掛けや発問を取り入れ確認するように進めさせた。そのことで、参加者の考えや反応を引き出すことに繋がった。

はじめの頃は、学生が作成した育児動画を視聴するだけの内容だった項目もあり、参加者は、体験できず、満足感が得にくかった。そこで、育児体験が可能となるよう、家庭にあるもので代用品を準備してもらった。①妊婦ジャケットはリュックとペットボトル、②バスタオルで作成する赤ちゃん人形、③郵送した紙オムツでオムツ交換の実技に活用するなど、準備を依頼し育児体験を可能とした。体験により参加者からの具体的な質問にも繋がった。妊婦体験では、夫から、「ちょっと動いただけなのに結構大変だった」、「家事を協力しようと思う」などの感想があった、妊婦からは、「夫に妊婦体験を体験してほしかったので体験できて良かった」と好評だった。

(2) リアリティを追求した学内演習

学内演習の2事例の褥婦は、臨床でもよく受け持つ①経陰分娩の初産婦、②帝王切開の経産婦の事例とした。事例はそれぞれ、産褥1日、術後1日からスタートした。学生は、5人グループで1事例を受け持

たせた。実習評価や実習内容、記録等に関して、教員間で検討したところ、臨地と同様で可能と判断した。

褥婦の日々変化する進行性変化や退行性変化、全身の回復、授乳を中心とした育児技術の習得、退院後の生活に向けての調整など教員がリアルに演じた。日数によって変化する子宮の大きさ、乳房や外陰部の状態は、模型を装着し観察させた。帝王切開術後の状態に関しては、フォーリー、硬膜外チューブ、点滴ルート、間欠的空気圧迫装置装着、ドレッシング材の貼付など、術後の状態が視覚的にも捉えさせた。夜間の情報は、模擬カルテに追記し、実習時間外の情報を追加していけるようにした。緊張感をもった褥婦との関係性の構築や会話のやり取りは、教員が褥婦役、臨床指導者役をすることにより担保した。また、臨地実習に近いスケジュールで学内実習を展開した。

コロナ禍での臨地実習は、直接対象に接触できず、見学が中心で、コミュニケーションも15分以内/1回の制限があった。しかし、学内演習では、学生にも観察や援助を実践させた。褥婦は、援助を通して意図的に反応を返し、心理的・社会的な課題や退院後の生活なども捉えられるようにした。援助実施後には、振り返りをグループで行い、学びを共有した。2事例の特徴を教員が演じ分け、その違いを学生全員が学べるように、合同での検討会を開催した。また、学生では難易度が高い授乳支援などについては、指導者がモデルとなって看護を実践し見学させた。

3) 評価

(1) 対象理解と体験を工夫した遠隔の育児教室

学生の声掛けや発問に、妊婦夫婦は、育児技術の何に疑問を感じているのか、何が難しいと感じているのか、夫からは妻の大変さやサポートする必要性に気づいたなどの感想を話され、学生は夫婦の思いを知ることができた。また、交流会では、夫婦が生活でどのようなことを知りたいのか、分娩や育児についてどう決定しているのかなどを話された。学生のアンケートからは、「夫婦が笑顔で一緒に体験されており、夫婦の生まれてくる子どもに対する愛情や期待など感じることもできた」、「自分たちが考えている以上に育児に対して色々な疑問や気にされていることがあることを知った」、「妊娠期に気になっていることが、質問や意見交換で知った」などの意見があった。このように、遠隔でも、参加者の反応や思いを引き出せれば、学生は、妊娠期の対象の理解に繋げることができた。

しかし、別の学生の意見として、「実際に会って色々話をしたかった」、「画面上なので、反応がわかりづらかった」などの回答があった。参集と比較すると余談も少なく、映像からの情報では、対象理解には限界があった。それらを補うために、限られた情報から対象の思いや考えを想像させるような振り返りなども取り入れたい。

参加者からの感想では、「人形の作り方を送ってもらっていたので準備できて良かった。紙オムツで練習できて良かった」などの意見があり、体験できたことで満足感が得られた。

終了後の参加者の無記名アンケートからは、「妊婦体験により妊婦に対するイメージ化」、「育児に対するイメージ化」、「育児準備に役立つ」、「育児の不安の軽減になる」などに対して、「できた」または「少しできた」と回答する方が全員であり、否定的な意見はなかった。このような参加者からの評価は、育児準備の助けになったと判断できる。教室の内容が、汎用度の高い育児技術中心であり、そのことも参加者の満足感になっていた。学生にとっても参加者の評価が、実習における達成感に繋がっていた。

(2) リアリティを追求した学内演習

学生のアンケート(表7)からは、【学内演習に変更になって良かった点】について、臨地に近い環境の設定や教員が実際の褥婦になり切って演じたことで、イメージ化ができたことが良かったと述べている。日々変化していく状態も観察できたこと、見学だけでなく実際に受け持ちと接するような関わりや指導・援助などができたことが、学内演習の満足感に繋がっていた。また、1事例をメンバーで共有し、検討する時間を設けたことで、1人では考えられなかった点にも気づくことができ、視点の広がりや事

例の理解が深まっていた。褥婦・臨地実習指導者役を教員が行い、臨場感をもって演習したことは、学生にとって、模擬患者や模型での限界はあっても、対象をイメージすることにつながったと考えられる。また、コロナ禍での臨地実習は、見学が中心であったが、学内演習でロールプレイを取り入れたことで、観察や援助を実践でき、対象からの反応があり、実践の満足感に繋がっていた。安酸氏が述べているように⁸⁾、この学内演習は、学生の関与と動機づけを促進した代替案になったと言える。

更に学生の学びの進度に合わせて実習内容を調整でき、学生間での検討会も十分にもてるなどの利点があった。それは、学内演習の強みでもあり、学生の思考過程の深化に繋がった。また、経膈分娩後の褥婦と帝王切開後の褥婦、初産婦と経産婦という、典型的な両者を設定して比較することで、それぞれの特徴を全員が学ぶ機会ともなったと考えられる。2例の褥婦は、実習日数に合わせて産後の経過も日を追うように進めたことで、経膈分娩と帝王切開、初産と経産の違いや特徴も踏まえながら経日的な変化が理解できたのではないか。ロールプレイであっても母性の看護実践を学生が行えたため、自身の援助の評価に繋がった。

このように演習をすすめたことで、臨地と同様の実習評価も可能となった。

4) 今後の課題

遠隔で画面の限られた映像を通しての反応を捉えることの限界がある。遠隔での対象理解は、参集型よりも限られてしまう。学生の指導案の指導は、その工夫を評価しながらも、どうすればわかりやすく伝えられるか、対象の育児準備状況や思い・考えを引き出せるかを学生に考えさせながら進めていきたい。

学内演習の課題としては、モデル人形では、温かさ、柔らかさ、動きなどは、体験が困難である。また、緊張感のある関係性の構築やダイナミックな状況の中で対象を理解し援助していくことは、リアルな臨床の現場でしか学べない。今回、評価表は、学生へ学ばせたい内容を改めて考える機会となり見直しに繋げたい。

コロナ禍での代替えとして、学内での演習や遠隔での取り組みなどで、対象を理解させるために、他の学校でも様々な取り組みをしている。長谷川らのシミュレーション教育の方法⁹⁾、戸村らの臨地と学内・遠隔を組合せた実習¹⁰⁾などの報告がある。どのような方法を取り入れたとしても、学生に学んでほしい内容や意図を教員間で十分に共有し、準備しながら代替えを考えていく必要がある。今後も、効果的な取り組み事例を参考にし、学ばせたい内容を精選しながら、コロナ禍においても学生にとって、学びの深い実習になるように、実習方法を検討していきたい。

表7 学生の学内演習後のアンケートより

●学内演習に変更となって良かった点

【臨床に近い場や事例の設定とロールプレイに関する学び】

- ・教員が実際の褥婦さんを演じてくれたことで臨地実習に近い学内実習ができ、さらに現在臨地でも見学実習が多い中、学内で行ったことでフィジカルアセスメントを実際に行えたことが良かった。(4名)
- ・病棟実習のように受け持ち褥婦を教員がしてくれ、日々変化していく状態を病棟にいかなくても観察でき、イメージしやすく理解が深まった。(4名)
- ・臨床と同様に受け持ちと接するような関わりや指導、ケア、観察ができ、想像しながら実習に取り組むことができた。
- ・実際に自分たちが援助を行うことができ、技術を学ぶことができた

【メンバーで共有し検討することの学び】

- ・演習により、イメージをつかみやすく、メンバー間で1人を受け持ち、ずっと話し合うことができた。メンバーで1人受け持ち、検討するので、より様々な視点から物事を捉えることができた。さらに、記録物の時間が多く、アセスメントを深められた。
- ・グループごとに模擬褥婦の教員に対して病棟で行われているケアを行ったり、模擬指導者に報告する場面では、事前にグループでの話し合いの時間を設けてもらえたので、1人で考えるよりも理解が深まった。

●学内演習に変更になって困った点

【対象のイメージがつかない】

- ・新生児や産婦という実際の対象者と関わることができず、具体的なイメージがつかなかった。

4. 老年看護学

1) COVID-19感染拡大による実習への影響および問題点

老年看護学実習は、老年看護学実習Ⅰ（1単位）と老年看護学実習Ⅱ（3単位）から構成されている。老年看護学実習Ⅰでは認知症高齢者について、認知症という“疾患”だけでなく一人の生活者として総合的に理解することを目的とし、実習を行っている。

一方、老年看護学実習Ⅱは、老年期にある人の加齢変化と疾病の特徴を理解した上で、高齢者と家族の状況に応じた看護の学びを深めることを目的としている。

このような実習目的のもと、COVID-19感染拡大以前では老年看護学実習Ⅰは認知症対応型共同生活介護（以下、グループホームとする）や介護老人保健施設、老年看護学実習Ⅱは病院にて実習を行っていた。

高齢者がCOVID-19に罹患した場合、寝たきり状態を招くこと等については周知の事実である。行動制限等の緩和が行われる中、病院で行う老年看護学実習Ⅱは臨地実習が可能になってきているが、老年看護学実習Ⅰは依然として全日程において学内で行わなければならない状況が続いている。

また、老年看護学実習Ⅰは、認知症をもつ高齢者を一人の生活者としてどのように理解するかが課題であるが、認知症高齢者と接した経験をほぼ持たない学生にとって、学内実習で認知症高齢者を理解するのはかなり難しいことと思われる。したがって、本報告では、老年看護学実習Ⅰを学内で実施する上での工夫等について述べる。

2) 実習への具体的取り組み内容

老年看護学実習Ⅰのスケジュールと実習内容は、以下のとおりである（表8参照）。

表8 老年看護学実習Ⅰのスケジュールと実習内容

	月	火	水	木	金
午前	認知症講義 DVD①視聴 「ようこそ認知症世界へ」	DVD②視聴 「不安のある高齢者」 GW・発表	DVD④視聴 「認知症の第一人者が認知症になった。(NHKスペシャル)」 GW・発表	演習 (ロールプレイング) 高齢者・看護師・観察者 GW	学びの発表
午後	国家試験問題	DVD③視聴 「帰宅願望のある高齢者」 GW・発表	DVD⑤視聴 「ぼけますから、よろしくお願いします。(ドキュメンタリー映画)」 GW・発表	GWの発表	実習終了後の面接

(1) 老年看護学実習Ⅰの工夫

学内実習にて学生が認知症高齢者の全体像を理解することを目標に、DVD視聴やロールプレイングを中心に実習をすすめた。

① DVD視聴について

認知症高齢者の Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia（以下、BPSDとする）の背景にある高齢者の言動や行動の意味を読み取るとことを目的に、実習2・3日目は実際の認知症高齢者事例を取り上げたDVDを視聴した。

一般的に、興奮や暴力、帰宅願望等のBPSDは、認知症高齢者本人の問題として取り上げられることが多い。しかしながら、これらの症状は本当に認知症高齢者自身に問題の要因があるのか、また、そもそも、“問題”であるのか。高齢者本人の立場から個々の事例を考え、認知症という疾患の枠組みにとらわれず一人の人間としての姿を考察するために、認知症高齢者のライフヒストリーを踏まえたドキュ

メンタリー映像や書籍を活用している。

ドキュメンタリー映像『認知症の第一人者が認知症になった』において、長谷川和夫氏は「認知症になっても見える景色は変わらない」と語っている。また、書籍では「そもそも認知症になったからといって、突然、人が変わるわけではありません。昨日まで生きてきた続きの自分がそこにいます」とも述べている¹¹⁾。

老年看護学実習ⅠではDVD視聴等を通し、認知症高齢者である長谷川氏が述べる「認知症になっても見える景色は変わらない」という言葉について学生が理解を深めることを重視し、実習を展開している。

②ロールプレイングについて

グループホームに入居している、帰宅願望がある認知症高齢者のシナリオを作成。シナリオには、高齢者の年齢や性格、家族構成、生活歴などの情報が記載されている。学生はこれらの情報を踏まえた上で、グループホームから自宅へ帰ろうとする高齢者と、これを引き留めたい看護師のやり取りの場面において、高齢者役と看護師役を演じている。

ここでの狙いは、“なぜ、高齢者が自宅へ帰りたいか”について、学生が高齢者の思いを推察することである。看護師の制止を振り切って自宅へ帰ろうとする高齢者の行動の背景にある思いを汲み取ることができれば、一時的ではあっても、高齢者の帰宅願望を緩和できる可能性がある。また、この関わりは高齢者の不安軽減に繋がると思われる。認知症高齢者の立場から思いを推し量ることの重要性と、どのように考えれば相手の思いに近づくことが可能になるかを考えることを狙いとして、ロールプレイングを実施している。

3) 評価

老年看護学実習Ⅰを履修した学生からは、以下の意見がきかれた（表9参照）。

表9 老年看護学実習Ⅰ履修後の学生の感想

最初は認知症高齢者の捉え方を現在の発言からしか考察できなかったが、その人が生きてきた時代背景や生活を見ることが大事だということを理解することができた。
認知症のリアルな映像を見たのが初めてで辛くて考えられない部分もあったけど、認知症の人への対応や認知症の人の背景を捉えて、認知症であるないに関係なく一人の人として捉えることが大事だと学ぶことができた。
認知症に対する偏見が無くなり、認知症に対する人の見方がガラッと変わった。また、その人の内面を探る姿勢がとても重要であるというこれからの看護観に繋がる基本的な考え方を学べてすごく身になった実習になった。
事例から、患者の意図を正しく理解するプロセスや重要性、疾患よりもその人に焦点をあてることを学んだ。
認知症高齢者をどのようにして捉えたらよいか理解することができた。これから先、認知症の方と関わる機会で自分の看護観を深掘りできるようになりたい。
DVD 視聴や長谷川さんの本を読んだことで、以前より認知症のことについて理解し、私たちの関わり方次第で生きやすくも生きにくくもなってしまうことにも気づくことができた。
事例が多いなと思ったが、沢山考えることができ認知症高齢者への見方が変わった。
色々な症状を持つ人やそれぞれの性格や生活歴が違うため、色々な方のことを考えることが出来て良かった。

老年看護学実習Ⅰを履修した学生の感想からは、認知症高齢者を理解することの難しさはあったものの、実習目的である“認知症という“疾患”だけでなく一人の生活者として総合的に理解する”ことは、概ね達成されていると思われた。表9に示す感想は一部ではあるが、これを見る限り、学生の認知症高齢者に対する否定的な意見は聞かれなかった。

このように、全日程を学内実習で行ったとしても、思考レベルでの目標はほぼ達成できたと思われる。しかしながら一方で、対面実習ではないため、認知症高齢者との直接的な関わりができないことに由来する課題があると考えられる。

これらの点については、先行研究でも明らかになっている。

COVID-19感染拡大以前に行われた認知症高齢者を対象とする対面実習において、学生は認知症高齢

者の言葉の背景にある心理状態を推し量り、これを受け止めようとする気持ちを持つことが報告されている¹²⁾。また、学生は高齢者と直接的に関わることで、初対面の学生を受け入れてくれる認知症高齢者の順応性の高さや寛容さに気づき、これを高齢者の“強み”であると捉えることができていた¹³⁾。

一方で、対面での実習は学生にとってポジティブなイメージだけをもたらすものではないことも明らかになっている。学生は認知症高齢者から何度も同じことを言われることに悩み戸惑うことを経験し、認知症ケアの難しさを痛感していた。しかしながら、同時に、学生は繰り返される高齢者の言葉には重要な意味があることも学び取っていた¹³⁾。

また、グループホームでの臨地実習では、認知症ケアに従事する専門職の姿を通し、その人らしさを理解するケアが認知症高齢者の安心につながることを認識できたとの報告も行われている¹⁴⁾。

以上より、認知症高齢者を対象とする臨地実習での学生の学びは、高齢者等との直接的な関わりを通じた上で、“認知症”という疾患にとらわれず高齢者を一人の人として理解することができている。また、高齢者との関わりがあればこそ、“認知症”という疾患を抱えた対象を理解することやケアの困難さについて、体得できた学びがあると思われる。

4) 今後の課題

本学の学内実習では、認知症高齢者をどのように捉えるかという“思考面”においては、実習目標の到達は可能であると思われる。しかしながら、臨地実習での学生の学びに関する先行研究をみると、認知症高齢者との直接的な関わりを経て得られる学びが不十分であることは否めず、この点については先行研究でも指摘されている。

COVID-19感染拡大後、臨地実習を学内実習に代替した演習の工夫は他施設でも本学と同様に行われている¹⁵⁾。そこでは、認知症高齢者が主役であるドキュメンタリー映画を使用し、認知症高齢者について、ライフコースの延長上の生活者として理解することを実習目標の一つに挙げている。しかしながら、ここでも高齢者との直接的な関わりができないことによる問題が指摘されており、本学においてもこの問題をどのように解決するかが今後の重要な課題である。

5. 在宅看護学論実習

1) COVID-19感染拡大による実習への影響及び問題点

在宅看護学論実習では、在宅看護の目的・特徴の理解、看護過程の特徴の理解、地域包括ケアシステムにおける看護職の役割についての理解、在宅看護を担う専門職としての態度をとることができることを目標として、2週間（中8日間を臨地）の臨地実習を行っている。

COVID-19感染拡大前は20施設で実習を行っていたが、感染拡大後は14施設に減った。さらに、緊急事態宣言や感染者数の増加に伴い、実習受け入れ中止になることがあるという施設との事前調整を踏まえ、実習体制を整えた。3年次生112名の受け入れ施設を確保するために通常であれば、2週間2~3名の学生を受け入れている施設に対して、前半1週間2名、後半1週間に異なる学生2名、計4名の学生を受け入れ施設に尋ねた。結果、4施設から受け入れ可能と回答を得た。

そのため、令和3年9月20日～令和4年3月4日までの期間の感染状況に応じて、2週間臨地実習、前半1週間臨地実習で後半1週間学内実習、前半1週間学内実習で後半1週間臨地実習、2週間学内実習の4パターンのいずれかで実習することになった。さらに各施設での感染対策を遵守できるよう感染対策用の物品を整え、施設ごとの事前オリエンテーションを行い、感染対策を徹底した。最終的には2週間臨地実習学生78名、1週間臨地実習21名、2週間学内実習学生13名となった。しかし、臨地実習において学生の訪問を受け入れてくれる療養者が減少したため、訪問件数としては0~2件/日程度となった。

2) 実習の具体的な取り組み

実習方法4パターンの内、共通する実習1日目と10日目について紹介する。1日目は学内でオリエンテーションとロールプレイを行った。ロールプレイはフィジカルアセスメント、感染予防、コミュニケーション技術、マナーを振り返り、訪問に必要な知識と技術を養う目的で行った。10日目は学内で受持ち療養者の事例発表会と臨地実習での経験の共有、カンファレンスを行った。以下は4パターンの中8日間の実習方法を紹介する。

(1) 2週間臨地実習の場合

実習2日目から9日目までは、ひとりの療養者を受持ち、看護過程を展開した。5日目と9日目に受持ち療養者の看護過程を発表し、指導を受けた。2週目の同行訪問時に訪問看護師と共に看護計画を実施、評価した。さらに受持ち以外の療養者への訪問看護にも同行して学びを深めた。コロナ禍で経験できる学生は減少したものの、サービス担当者会議や退院時カンファレンスに参加できた学生もいた。

(2) 1週間臨地実習 / 1週間学内実習の場合

同じ施設で実習する4名の学生で前半1週間臨地実習と後半1週間臨地実習の学生がペアを組み、同じ療養者を受け持った。学内では毎日、テーマを決めカンファレンスを行った。

①前半1週間臨地実習 / 後半1週間学内実習の場合

前半1週間臨地実習を行う学生は、実習2日目の臨地実習からカルテや同行訪問を通して情報収集を行い、看護過程を展開した。実習5日目に中間カンファレンスを行い、受持ち療養者の看護過程を発表して指導者から指導を受けた。実習3日目もしくは4日目には半日は学内に戻り、学内実習中のペアの学生から質問形式で受持ち療養者に関する情報を提供した。

後半1週間の学内実習では、1日2件、同行訪問する設定で臨地での体験に近い訪問看護事例のDVD（以下、訪問看護DVD）を視聴した。視聴を通して把握したことを臨地実習同様の実習記録に記入して学びを深めた。さらに受持ち療養者の住んでいる地域にある社会資源について調べ、利用している社会資源と今後必要となる社会資源について資源マップを作成した。

②前半1週間学内実習 / 後半1週間臨地実習の場合

前半1週間の学内実習では1日1~2件、訪問看護DVDを視聴した。視聴を通して把握したことを臨地実習同様の記録用紙に記入して学びを深めた。また、前半1週間臨地実習の学生から質問形式で受持ち療養者に関する情報収集を行い、看護過程を展開した。

後半1週目の初日に看護過程の発表を行い、受持ち療養者訪問時に訪問看護師と共に看護計画を実施して9日目に評価および学びを発表した。10日目の事例発表会で実施した計画について発表し、ペアの学生中心に質疑応答した。

(3) 2週間学内実習の場合

訪問看護DVDの療養者1名を受持ち療養者として看護過程を展開した。受持ち療養者以外の訪問看護DVDを1日1~2本視聴し実習記録にまとめた。5日目に看護過程の発表を行った。翌週、教員が療養者、ペアの学生が家族役となりロールプレイを行い、立案した看護計画を実施、評価した。また、受持ち療養者の住んでいる地域を自身で決め、決めた地域の社会資源について調べ、受持ち療養者が現在利用している社会資源と今後必要となる社会資源について資源マップを作成した。そして、2週目には退院調整やサービス担当者会議が行われているDVDを視聴して多職種連携や看護の継続性について考える機会を設けた。毎日、視聴したDVDに関するカンファレンスを行った。実習9日目は看護過程の追加修正および学びの発表を行った。

3) 評価

実習目標の「在宅看護の目的・特徴の理解」に関しては、2週間学内実習の学生よりも臨地での実習を経験している学生の学びが深まっていた。特に後半1週間臨地実習の場合が最も深まっていた。これ

は、前半1週間 DVD を視聴後、指導やカンファレンスを通して、観察のポイントが明確になったことで、実際の訪問場面において療養者や家族の健康や生活状態、看護実践を観察することができたからだと考える。逆に教材用に作成された DVD の視聴の場合、30分や60分すべての訪問場面ではなく、テーマに沿った部分を短時間に編集されているため、特に生活状態の把握ができず、在宅看護の特徴を理解することが実際に経験するよりも難しかったのではないと考えられる。

一方、「看護過程の特徴の理解」は学内実習の学生の学びが深まっていた。これは時間をかけて文献等活用しながら看護過程を展開することができたためだと考える。特に受持ち療養者の社会資源の活用については、後半1週間学内で実習した学生の学びが深まっていた。前半1週間、臨地において居宅サービス計画書や実際の訪問場面等を通して社会資源に関する情報を収集して、後半の学内実習で文献や受持ち療養者の居住地の社会資源を調べたことで、介護保険制度などのサービスや地域にある社会資源の理解が深まったことが影響していると考えられる。

また、「地域包括ケアシステムにおける看護職の役割についての理解」も学内実習の学生の学びが深まっていた。これは COVID-19感染拡大以降、事業所にスタッフが集まってミーティングをする機会が減ったこと、サービス担当者会議が開催されず書面での情報交換になったこと等が大きく影響していると考えられる。これまで実際の経験を通して理解を深めることができていたが、今回は書面を読み込まなければならず、イメージが付きにくかったと考える。一方、DVD ではサービス担当者会議や退院前カンファレンスの実際を視聴したため、イメージが付きやすかったと考える。

今後の課題

学内において訪問看護 DVD を視聴することで、在宅看護の特徴を理解することはできていた。山口らの調査においても「動画の内容から訪問看護の実際がイメージできた」¹⁶⁾と学生は回答しており、動画の視聴は疑似体験を支援する方法としては効果的であったと考える。しかし、学内実習の学生は実習に一定の満足は述べたものの、「実際に同行訪問したかった」「もっと訪問看護に行きたかった」と述べた。訪問看護を経験した学生の多くは、「在宅は実際に経験してみなければわからない」と評価していた。各家庭での生活環境の違いや価値観の違い、状況に応じた看護判断、限られた時間の中でのケアの提供、訪問看護師の看護技術の見学等を経験することで学びを深めるだけでなく、看護観の深化につながっていることが学びのレポートや最終面談における発言などから把握できた。

一方、例年よりも自己学習時間が増えたことで、経験したことを文献等の活用を通して学びを深めていた。そのため、COVID-19感染拡大によって、訪問看護への同行や地域で行われる会議への参加の機会が減少したものの、今後は限られた経験を意味づけることができるよう支援するための工夫がより求められると考える。今回、在宅看護論実習においては実際に訪問看護師とオンラインで対話する機会を設けることはできなかったが、4年次の統合実習において、管理者に質疑応答する時間を設けた際には活発な意見交換をしていた。少しでも実際の臨地での経験に近い環境を整えることができるかが、今後の大きな課題である。今回の臨地実習において実習施設から多大なる協力と支援を受けた。今後も実習施設との連携を深め、COVID-19感染拡大状況下にあっても充実した実習体制を整えることができるよう努めたい。

Ⅳ. おわりに

今回、COVID-19感染拡大下における本学科の組織的取り組みと、成人看護学（急性期）、精神看護学、母性看護学、老年看護学、在宅看護学における臨地実習の取り組みと課題について報告を行った。

組織的取り組みとして学生を巻き込んだ感染対策委員会の立ち上げや遠隔授業における教員のスキルアップ支援、看護教員の福岡市ワクチン接種場への応援などを実施し、危機を学科全体で乗り越えチャンスに変えることができた。

それぞれの専門領域では、対象者の全体像やケアの方法など専門領域の特徴を加味して、臨地実習の場面により近づくようにリアリティを追及して学生にイメージしやすいような工夫やより学びを深められるような取り組みが行われていた。いずれも、実際に患者との直接的関わりを得られず多くの課題がある中で、試行錯誤しながらも、学生の学習効果を最大限にするための工夫が行われていた。

今後もしばらくは、臨地実習が制限される状況は続いていくことが予測される。臨床現場での看護学実習が制限される状況においても、今回明確になった学内実習におけるメリットや課題を生かしながら看護教育の質を担保し向上していくことが必要である。

本報告に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

【引用文献】

- 1) 文部科学省・厚生労働省他. 事務連絡
令和2年2月28日付 <https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf>, 令和2年6月1日付
<https://www.mhlw.go.jp/content/000636112.pdf>, 令和3年5月14日付
https://www.hospital.or.jp/pdf/15_20210514_01.pdf (検索日2022年10月26日)
- 2) 文部科学省. 事務連絡, 令和3年5月14日 https://www.mext.go.jp/content/20210518-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
(検索日2022年8月30日)
- 3) 文部科学省 看護学教育の在り方に関する検討会. 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, p10.
2002.3.26. <https://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf> (検索日2022年8月30日)
- 4) 日本看護系大学協議会. 新型コロナウイルス感染症影響下における看護系大学の2020年度後期の臨地実習の実施状況に関する調査, 2021, <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/07/JANPUyoubousyosiryou-MEXT.pdf> (検索日2022年8月30日)
- 5) 守村洋, 伊東健太郎. 当事者参加による精神看護学シミュレーション教育のプログラムの試みと学生の学び. 日本精神保健看護学会誌, 30 (2), 9-18, 2021.
- 6) 大西信行, 松田陽子, 萩典子. オンラインによる精神看護学実習 オンラインを活用した入院患者とデイケア利用者とのコミュニケーションの試み. 日本精神科看護技術学術集会誌, 64 (2), 121-125, 2022.
- 7) 井田歩美, 温井祥子, 片岡久美恵他: 新型コロナウイルス禍における乳児を育てる母親の不安, 困惑の様相一口コミサイトへの投稿内容の分析一, 母性衛生 (0388-1512) Vol. 62, No.3, 2021.
- 8) 安酸史子: 臨地実習の代替案を考えるうえで必要なこと, 看護展望, Vol.45, No.13, 2020
- 9) 長谷川和子, 佐々木裕子, 佐藤ユキ子: 【学生の実践力を養う 臨地実習の代替策】 臨地実習の代替策として行われた演習事例 母性看護学・成人看護学臨地実習の代替策, 看護展望, Vol.45, No.13, 2020.
- 10) 戸村佳美, 緒方京, 我部山キヨ子: コロナ禍における母性看護学実習の工夫と評価, 看護教育, Vol.62, No.10, 2021.
- 11) 長谷川和夫. “ボクはやっと認知症のことがわかった 自らも認知症になった専門医が, 日本人に伝えたい遺言”, KADOKAWA, 東京, 5, 2019.
- 12) 高野真由美, 松本佳子, 老年看護学実習 I で看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ち 川崎市立看護短期大学紀要 21 (1), 31-38, 2016.
- 13) 高野 真由美, 松本 佳子 認知症高齢者との関わり時に看護学生が抱く気持ちへ関連する要因: 看護学生の共感性類型における認知症高齢者イメージ要因からの分析. 川崎市立看護短期大学紀要 25 (1), 47-54, 2020.
- 14) 難波 香, 木下 香織, 安藤 亮. 認知症グループホームでの老年看護学実習における学生の学び - 第二報 看護の役割と機能 -Professionalism- に着目して-. 新見公立大学紀要. 41 141-146, 2020.
- 15) 木下 香織, 安藤 亮, 難波 香, 新型コロナウイルス感染症の影響下における老年看護学実習の代替学内実習での学生の学び. 新見公立大学紀要. 42 (2), 55-62.2022.
- 16) 山口裕子, 村瀬美香, 松本佳代他2名: 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告~在宅看護実習での学生アンケート結果から~, 熊本保健科学大学研究誌, 18, 103-115, 2021.